

酒井抱一筆〈夏秋草図屏風〉の銀地背景について試論

立木美江（九州産業大学大学院）

東京国立博物館所蔵酒井抱一筆「夏秋草図屏風」は現在重要文化財であり、尾形光琳筆「風神雷神図屏風」の裏絵であったことが広く知られる作品である。依頼主は将軍家斉の実父、一橋治済であり、目的は古希や婚礼の祝い、抱一の腕試しなど諸説ある。その背景の銀地は夜を思わせる月光に見立てた表現などと言われる。本作品の研究史は画評にはじまり、表絵との関連性や下絵による時代考証が中心に行われ、現在では、玉蟲敏子氏などによって絵解きにまで及んでいる。しかしながら作品の詳細、技法的な側面について言及した先行研究はない。ここでは制作者として初めて作品検証を試み、「夏秋草図屏風」の特性を明らかにしたい。

発表の主題は銀地背景の技法と目的を明らかにすることである。技法を検証し、古色表現・残像表現・動的表現などの効果を解釈し、その背景の技法の目的が絵画表現や時代色づけにあることを示す。つまり作品の詳細から「夏秋草図屏風」に新たな解釈を加えるものである。

比較対照には制作時期がほぼ同じ抱一筆銀屏風を選択した。静嘉堂文庫美術館所蔵「波図屏風」、出光美術館所蔵「紅白梅図屏風」、同美術館所蔵「四季花鳥・波濤図屏風」のいずれも抱一筆の作品三点である。個々の屏風の銀地背景を箔の大きさの単位でみると、正方形の銀箔を、実際に押したようにみせる技法が他の銀屏風とともにあるが、「夏秋草図屏風」独自の技法としては輪郭線のみを描いて銀箔に似せたものもある。全体をみると、背景の正方形の描法は、モチーフの配置に従って成されることも分った。銀箔本来の効果をつつつも、一方では銀箔の持つ強い光彩を避けるため上から泥を用いて柔らかな光を放つ効果も狙っていることが観察された。つまり背景は余白でなく余情として解釈され、絵画効果をより一層高めている。

他の抱一筆銀屏風でない「夏秋草図屏風」独自の表現には、主なものに動的表現の効果がある。この筆による描写技法、いわゆるスピード線が風を可視化し、背景の動的な要素が手前のモチーフに動きを与える効果を与えている。次に残像効果、いわばコマ送りの表現がある。この描写は一見汚れにみえるが、時間経過を感じさせる効果がある。次いで剥落の効果が挙げられるが、これは現状模写的な技法で描かれ、汚れや傷を絵柄に無関係に描く。このように背景の絵画効果には他の三屏風に見られない独自のものがあつた。そういった効果は染みや傷を思わせるものであり、これは時代色をつけ効果も狙っている。

以上から「夏秋草図屏風」の擬古的表現は、表絵の100年後に描かれたことへの配慮によるものであると結論づける。本作品の新たな解釈として、作品背景に抱一筆作品の技術的な力量、依頼主との美意識の共通性なしには成し得ない技であつたことが推測され、さりげない技に江戸時代の美的価値観を垣間見ることが出来る。